

研究・調査報告書

報告書番号	担当
1 4 4	滋賀医科大学社会医学講座福祉保健医学部門
題名 (原題/訳)	
Recall bias for seven-day recall measurement of alcohol consumption among emergency department patients: implications for case-crossover designs. 救急部の患者の7日間の飲酒量の思い出しバイアス: ケース・クロスオーバー研究への影響	
執筆者	
Gmel G, Daepfen JB.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
J Stud Alcohol Drugs. 2007 Mar;68(2):303-10.	
キーワード	
思い出しバイアス、アルコール、ケース・クロスオーバー研究	
要 旨	
目的: 短期間の飲酒量の思い出しバイアスを調べる。	
方法: スイスのローザンヌ大学the Lausanne University 救急部外科の患者918人が介入研究に参加した。参加者はアルコール摂取量が1週間の平均が男性で14杯(1杯はエタノール10g)以上、女性で7杯以上、または最近1か月で少なくとも男性で5杯以上、女性で4杯以上の飲酒があった者。アルコール摂取量は毎日、7日間思い出し記録した。	
結果: 思い出したアルコール摂取量は思い出す期間が長くなるほど減少した。1日前の記憶と比べ7日前の記憶では0.9杯減っていた。一週間のどの曜日でも思い出しバイアスは明らかに見られたが、特に金曜日と土曜日の飲酒量の思い出しバイアスが最も大きかった。思い出しバイアスは機会飲酒者(週に4日まで)で有意であり、常飲者(週に5日以上)では有意でなかった。	
結論: 思い出しバイアスは飲酒量の調査には脅威となるだろう。思い出しバイアスが症例群と対照群の両群に及ぶ場合には尚更である。ケース・クロスオーバー研究でもこのバイアスが見られる。それは調査時から遠い日の(例えば一週間前の)飲酒量を対照とし、症例を調査の直前の(例えば6時間前の)飲酒量とするときである。ケース・クロスオーバー研究のリスク管理は特に機会飲酒者に焦点を置いているので、思い出しバイアスが機会飲酒者で多いという今日の知見はこのようなデザインでの結果が正しい加減である可能性を増やす。	